

# 山椒は小粒でも...



Vol.15

## 今年のお盆は、被災地で黙とう



お盆休みを利用して広島県呉市へお手伝いに行ってきた。現地も、お盆くらいゆつくりとしたいということでも、多くのところはボランティアの受け入れを中断しています。数少ない受け入れ可能なところを探して出発と相成りました。

【13日】夕方、電車で鳥羽を発ち、東広島にて前泊。

【14日】東広島市からレンタカーで約1時間かけて呉市へ。

普段は大渋滞らしいのですが、お盆ということもありすんなり到着。天応地区のボランティアセンターで受け付け。活動先までは歩いて約15分。センターに寄せられた被災者ニーズに応じて割り振られました。内容は、10人グループでの民家の裏庭の土砂の搬出。スコップと一輪車を使いました。土砂といつてもほとんどキレイな「砂」で、50cmくらい家の内外に積もっています。隣家は土地がさらに一段低いため、約

15m程度、これまた家の中まで積もっています。約1か月半たつというのにまだこの状態なのに驚かされました。(東広島へ戻り宿泊)

【15日】東広島から、呉市役所にあるボランティア本部へ。マイクバスに乗り40分かけて安浦地区へ向かう。8人のチームが3チーム集まり、民家の裏の畑に積もった土砂の搬出。がれきを取りのぞきつつ、近所の人を使うための土のう袋を作る。災害ボランティアの活動は基本的に10時〜15時頃ですが、このところの猛暑もあり、午前2時間、午後1時間とするとのことでした。しかも小まめな休憩、給水をとということ、15分作業したら10分休憩を。水は最低でも2ℓ飲むようにとの注意がありました。休憩ばかりで物足りなさを感じましたが、やってみるとちよつどいいペースでした。

偶然にもこの日は終戦記念日、ここ広島で黙とうをささ

げることになにかしら不思議な感じがしました。そのうち小雨が降り出し、作業はここまで。これしきの雨でやめるの、とも思いましたが、豪雨災害の現場に来ていることを考えれば当然の判断です。

いつものことながら、災害ボランティアは全くのプライベート。何人かの職員に「お盆に休みを取って被災地へ行くけど、一緒に行く？」と声をかけたところ、なんと3人も職員から手が挙がりました。被災の現場はもとより、ボランティアの受け入れく受援のあり方について、いくらかでも鳥羽が被災した時をイメージできたのではないかと思えます。

広島県では、同じ被災地の中でも避難した人、しなかつた人と行動が分かれた点に注目し、避難した理由やきつかけを問うそつです。まさにいろいろな想像をかきたてる現場でした。



Vol.173

教育委員会生涯学習課 ☎ 1268

## 今日も机にあの子がいない

「今日も机にあの子がいない」(昭和25年)長欠・不就学対策として全国で初めて高知県に配置された福祉教員の苦闘の記録から生まれた言葉です。終戦直後の混乱期、日本には貧困ゆえに学校に行けない子どもたちが数多くいました。

8月はさまざまメディアで戦中・戦後の日本の様子が報道され、空襲で焼かれた街、傷痍軍人や引き揚げ者、大変な状況が戦争を知らないかたへのメッセージとして流れていました。

ねむの木学園・園長の宮城まり子さんの「ガード下の靴磨き」の歌がはやったのも戦後です。食べることに必死になつて生きていました。日本人は貧しさから立ち上がり、驚異的な復興を遂げました。また、子どもたちの教育を取り巻く

環境も改善され、義務教育の無償化や高等教育の充実が実現されています。

しかし、世界にはまだ戦争が終わらず貧困にあえいでいる子どもたちがたくさんいます。石井光太さんの「絶対貧困」という本では世界の貧困の様子が紹介されています。一日の食事も満足にできない生活。路上生活を余儀なくされている人々。病気になるても医者にかかれず、薬も買えずに死んでいく子どもたち。いつ殺されるかもしれない戦火の中を逃げ惑う人々。ほかに、まだまだわたしたちが知らない世界の貧困の姿があります。貧困の中で、学びたくても学べず、父母の生涯と同じ道を歩んでいかざるを得ない子どもたちがいるのです。

教育は未来づくりです。そして、子どもたちは未来づくりの担い手です。戦後73年を迎え、日本においては平和社会の構築と経済の発展が進みました。しかし、その子どもたちの学ぶ権利を奪っている社会があります。子どもたちが夢を持って生き、笑顔あふれる世の中を未来へつなぐために、わたしたちができることは何があるのでしょうか。